

新 正伝

小悪魔JK 樹里奈の場合

小説 筆祭競介

挿絵 しゅがすく

立ち読み版



序章

私のペットになつて

006

第一章

わけありセクシークイーン

012

第二章

J Kの小悪魔な誘惑

046

第三章

草太も樹里奈も初体験

105

第四章

猫耳ペットにHなお仕置きをして

164

第五章

これが本当の私

203

終章

僕はますます君を好きになる

250

登場人物紹介

Characters



私……まだ誰とも
付きあったことないのに……

かわすみじゅり な

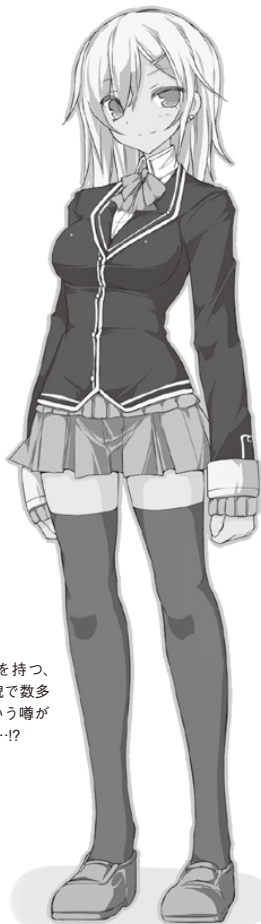
川澄樹里奈

セクシークイーンの異名を持つ、
学校一の美少女。その美貌で数多
くの男を虜にしてきたという噂が
ある。しかしその実態は……!?

たかつじそう た

高辻草太

樹里奈に片想いをしている
男子生徒。樹里奈に「ベッ
トになれ」と迫られることに。



そのまま制服ズボンのファスナーを下ろされてしまう。

「なっ!？」

キスの余韻でずっと意識がフワフワしていた草太も、さすがにそれで我に返った。慌てて抵抗しようとしたのだが、樹里奈が再び顔を急激に近づけてくる。

「私のキス、気持ちよかったでしょ？ 今から、もっと気持ちよくしてあげる」

「……ッッ!？」

樹里奈のようなセクシー美少女に、息が吹きかかるほどの至近距離からこんなことを言われて、童貞の草太が強硬に抵抗することなど不可能だった。

頭ではダメだと思っただけでも、体が期待してしまい、動きが自然と止まってしまう。

樹里奈はその隙を突くように、ズボンの中からペニスを引きずりだそうとしはじめる。

「……ビッチって噂……本当だったんだ……」

本当は違うんじゃないか、と自分はずっと信じていたのに——この大胆さは間違いない。そのショックのためか、ズボンに手をつ込まれるまでは、ファーストキスの余韻でピンピンに勃起していたのに、勢いが急に緩んでしまう。

「……ん？」

直接手にしている樹里奈もその変化に当然気付いて、意外そうな表情を浮かべる。そして、先ほどまでは剛直のためになかなか中から取り出せなかった肉棒を、簡単にポ

ロリと露出させた。

（川澄さん相手に……こんな風になっちゃう男なんていないんだろうな）

なんだか情けない気持ちになってしまい、ますますふんにやりしてしまう。

「……ふーん。緊張してるんだ」

「ふえ!!」

経験豊富なセクシークイーンは、こんなケースまで経験済みらしい。

自分が萎えた理由は『片思い相手が噂通りビッチだったから』なのだが、勃起しないケースを普通に捉える、その場馴れ感にとにかく驚いてしまう。

「ほら、リラックスして。私がちゃんと優しくしてあげるから」

樹里奈は甘く囁くと、ゆっくりペニスを右手でさすりだした。こちらが童貞と確信しているのか、その動きはおっかなびつくりに見えるほどで、とても優しい。

「つくふぁ!!」

まるで撫でるような手つきだが、それでも初めて異性に手コキされて、思わず鋭い声が漏れてしまう。

（自分でするのと、全然違う!）

手の感触からして、完全に別物だ。

指自体がかなり細く、それでいて骨のゴツゴツ感や、筋張っているような硬さはなく、

感触はとても柔らかだ。

しつとりと竿肌に着してくる女の指の快感に、自然と腰の奥がムズつきだす。

「あん!? ちょっと中に芯が入ったみたいになつて……そ、それじゃあ今度はココを」

「うわああ!? そ、そんなに大胆に、いきなりそんな先つちよを——ツくふああ!?」

樹里奈の手コキが自慰と決定的に違うのは、当たり前だが、己の考え通りにペニスが責められないことだ。自分でする時とは違うリズムで、全く予測していないところをいきなり指の腹で擦られる。

「ほーーら。今度はこっち側をこんな風に」

「つくふあ!? 裏筋をそんなにコシコシしちゃだめえええ!」

不意打ちのように新たな肉悦に襲われるために身構えることもできず、草太はその愉悅にあられもない喘ぎ声をあげ続ける。

（純粹におちんちんだけで感じる感覚って、こんな風なんだ!）

オナニーしている時は全く自覚していなかったが、その時は当然自分の掌で己自身の勃起を触っている。

性的刺激を受けながら、その掌からのフィードバックがない感覚が初めてで、男性器で生まれる快感だけをより深く味わえる。

「あはっ。もうこんなに大きくなったあ」

異性の指がもたらす純粹な肉悦に、そんな新鮮な感覚も上乘せされて、一度緩んだ男根が完全に剛直を回復させた。ビクンビクンと熱く脈動し、セクシークイーンの指使いをしっかりと受け止められるようになってしまう。

——シコシコ、すりりっ、シコシコ、ずりん！

そんなこちらの状態に合わせてか、樹里奈の責めも最初の慎重だったものから、大胆な動きへと切り替わっていく。

「ふわわわっ!? そ、そんな風にオチンチンを弄られたらすぐにイッちゃうよお！」

太い血管の浮いた竿肌部分を掌を使って丹念に扱き上げ、今にもはち切れそうなほどピチピチに張り詰めた肉先を、複数の指で絞り上げるように擦っていく。

真っ赤に充血した己の男根に、細くて美しい白い指が絡み付くたびに、今まで経験したことがない甘美な愉悅が弾け続ける。

「ココがそんなに気持ちいいんだあゝ」

そんな彼女の指が重点的に擦り上げはじめたのは、亀頭の根本。肉傘の裏側だった。

「そこはだめえええ！そこは一番だめなところなのおお！」

「うふふ♡ エッチの時にダメって言うのは、もっとしてって意味なんだよ」

小悪魔すぎる同級生のセリフに「そ、そんなあゝ」と草太は涙目になるが、彼女の有言実行な指使いに「つくふあああああ！」と顎が仰け反ってしまう。

実はまだ、最近やっと包茎から卒業したばかりで、強い刺激に慣れていない。

樹里奈の指が段差部分をなぞるように擦っていくと、電流のような鋭い肉悦がビリリッ^{ほとばし}と进り、どうしても甲高い声をあげてしまう。

「どう？ 私の指使いは？ 私のペットになれば、もっと気持ちいいことだってあげるんだけどなあ」

手コキをしながらこちらをじつくりと見下ろしてくる金髪と同級生に対し、少年は思わず顔を逸^そらした。

「……こ、こんなこともうやめてください！ 川澄さんらしくありません！」

自分が片思いしていた樹里奈と、イメージがあまりに違いすぎる。

確かに学園中の皆がイメージしている『セクシークイーン』かもしれないが、自分は違うと信じていたから。

ビッチというのは噂だけで、本当は普通の女の子だと思っていたから。

ここまでされて、自分のイメージが幻想であることはもうわかった。が、それでもこんなことをする樹里奈は見たくない。

男をペットにするためにいきなり男性器を扱いてくるなんて、たとえその相手が自分身でも、精神的にかなりショックである。

と、草太はそんな意味で『川澄さんらしくありません』と言ったのだが――。

「な、何を言ってるの！ 私は誰もが認める学園のセクシークイーンなんだからね！ まさか下手だとかそういうこと言ってるの！」

直後、樹里奈がムキになってそう叫んできた。

草太はもちろん、そんな意味で『らしくない』と言ったわけではない。

しかし相手は、なぜか自分の『らしくない』という発言を、『こんなテクニク、セクシークイーンらしくない』という意味でとつたらしい。

（な、ななななんでそんなカン違いするの!?!）

樹里奈は派手なルックスをしているが、頭だつて抜群に良い。同じクラスで授業中の受け答えを聞いている限り、相手の意図を察する能力も極めて高いと感じていた。

少なくとも、こんなカン違いをするような女の子ではないはずだ。

「あ、あの……その……そ、そんな意味で言ったわけじゃ全然なくって……」

全く想定外な反応に、草太がしどろもどろになって言い訳をすると、樹里奈の瞳がさらにキツくなる。

「超、プライド傷ついた！ 最初はここまでやるつもりはなかったけど——こうなったらこっちも本気出すから！」

どうやら自分のオドオドした態度のせいで、そのセリフが、取って付けたようなものに聞こえたようだ。

自分の隣に座り手コキをしてくれていた樹里奈が、今度は草太の股の間にその体を移動させてくる。そして自ら四つん這いの格好になると、真上を向いてそそり立っている男根にその美貌を近づけてきた。

「ちよっ!? 本気って、いったい何をする気ですか——っふああ!？」

正直、樹里奈の怒り方から考えて、アソコに噛みつかれるんじゃないかと思った。

しかし自分のセリフの途中で、肉先にいきなりチュッとキスをされ、思わず甘い声が漏れてしまう。

「熱ッッ!? 手でするのと全然違う……」

と樹里奈の方も、短く何かを咬いたようだが、草太の耳には自分の声に掻き消されてよく聞こえなかった。

「え? な、なんですか?」

自然と視線を彼女に向けると、なぜかびっくりしているように見える。草太はこんな時だというのに、それが不思議でキョトンとしてしまった。

しかし相手はそんなこちらの表情に気付くと、先ほど以上にその瞳をキッとさせて草太を強く睨んでくる。

「バ、バカにしないでよ! こんなのもしてることなんだから!」

金髪のセクシークイーンはますますムキになったようで、その形の良い桜色の唇を大き

く開き、男根をいきなりパクリと咥えてきた。

「つくふあああああああああ！」

キスだけの時とは比較にならない肉悦の衝撃に、草太は後頭部を体操マットに叩きつけるように大きく仰け反る。

彼女の口の中に包まれてしまった部分——最近やっと包皮が剥けたばかりの亀頭がとにかく熱い。

特に、さきほど重点的に指で擦られた肉傘の裏側に、彼女の唾液が伝い落ちてくると、まるで熱湯でも浴びたようにビクンと体が痙攣してしまう。

（でも全然、痛くない！ おちんちんが火傷しそうなのに、気持ちいい！）

凄まじい灼熱感が、そのまま極上の肉悦となつて快感神経を駆け巡り、マットに叩きつけた後頭部まで突き抜けてくる。

「どう？ これでわかった？ セクシークイーンの実力が」

一啜えで草太を仰け反らせた金髪の小悪魔が、自信を取り戻した顔で、改めてこちらの肉先をペロンと舐めてきた。しなやかな舌がそこに触れた瞬間、再び焼け付くような肉悦の衝撃がガツンと腰の奥へと突き刺さる。

「そ、そんなところ、舐めちゃだめえっ——つくふあああ!! ああああああ！」
舌奉仕の制止を求める声も、自らの喘ぎ声によって途切れてしまう。

「凄いでしょ私の舌捌き——レロんちゅん。さくらんぼの軸を結べるぐらい、いっぱい練習したんだから——チュチュんん」

樹里奈はまるで自分に言い聞かせるようにそう呟きながら、ペニスの根本部分を指でしっかりと固定しつつ、肉先をペロンペロンと舐めだした。

彼女が一舐めするたびに、肉傘のでっぱりが舌先がひっかかり、焼け付くような愉悅を伴いながらペニスがビンビンと揺れはじめる。

（こんなの、エッチすぎるよおお！）

樹里奈のような派手な金髪美少女が、挑むような目をして、男性器を弾き舐めている。

いっばいに突き出された桃色舌が淫らに踊るその光景は、草太のようなウブな少年には視覚的にも刺激が強すぎた。

「ほらほら。こんなのはどう？」

そうして草太に散々甲高い喘ぎ声を叫ばせてから、樹里奈の舌が今度はペニス全面を縦横無尽に這い回り出す。

（うわあー！ 川澄さんの綺麗な舌が、あんなにエッチに僕のおちんちんを舐め回して……た、たままないよおお！）

しかも立て続けに見せつけられるその卑猥極まりない光景と、己の股間から迸ってくる肉悦が完全にリンクしている。

視覚的にも、感触的にも、今までで間違いなく一番気持ちいい。

ペニスの付け根から先端までを、唾液が周りに飛び散るほどの勢いで樹里奈に一気に舐め上げられると、頭髮が全て逆立つほどの快感がゾワワツと全身を駆け抜ける。

「つくふあああああ！ らめっ！ そんなところ舌でコチヨコチヨしちゃらめえええ！」

彼女の舌先が先端の小さな縦穴を小刻みに舐めだすと、今まで以上にクリアな肉悦が快感神経を直撃し、草太はたまらず身悶えた。

「ほうら、どう！ 凄く気持ちいいでしょ！ でも、私のテクニクは舐めるだけじゃないんだから！」

彼女は再び男根を咥え、その宝石のような瞳にかかる前髪がふわふわと浮くほどの激しさで、頭を上下させはじめる。

——グチュ、ヌル、れるおん！ ぐちゅ、ぬちゅッ、ガポガポガポガポ！

舌責めだけで過去最高の気持ちよさだったが、柔らかな唇までもが奉仕に加わり、その快感量がさらに跳ね上がる。唾液のぬねりが唇との密着感を強め、肉棒の芯までフェラの愉悦が染み込んできた。

（それに川澄さんの顔がエッチすぎるし！ こんなのにイチちゃうよお！）

先ほどの舌をいっぱいに出した舐め顔もたまらなく卑猥だったが、男根を咥えて激しく上下させている顔も強烈だ。自分の勃起に合わせて変形する肉感的な唇と、その唇を窄め

るために凹んでいる頬の陰影具合がたまらない。

しかもその最中、金髪の小悪魔と視線が合う。

今までなら気恥ずかしくつてすぐに逸らしてしまっていた視線を、今は全く逸らせない。
(ああ! こんな時に、川澄さんと見詰めあっちゃってるよおおお!)

無論、樹里奈も視線を外さない。

「ンじゅるんちゅん——気持ちよすぎて、なんかすつごく切羽詰まった顔になってるよ——ンちゅんん」

フェラ当初から変わらない、まるで挑むような強い視線で——しかし、ほんの僅か眉間に皺を寄せて——ジッとこちらの目を見たまま、激しい口腔奉仕を続けている。

片思い相手のそんな攻撃的すぎるフェラ顔を見ていたら、ギリギリ踏ん張っていた官能の昂りが、あっさりと一線を越えてしまった。

「あああ! もうダメです! もうイッちゃいます!」

草太がたまらず、限界を叫ぶ。

と、激しく躍っていた樹里奈の顔がハツとして、そのままヌポンと啞えていた。ペニスを離してしまう。

「え、えつとお……い、いいよ! ほらイッちゃって! セクシークイーンなご主人さまにイクとこ見せて!」



我慢の限界だ。

彼女を求める欲情が、はち切れんばかりに股間で高まっている。

樹里奈の股間を覗き込むようにしていた状態から、草太はガバッとその身を起こすと、猛スピードでズボンとトランクスを脱ぎ捨てた。

極度に興奮しているためか、今は体中のケガの痛みを嘘みたいに全く感じない。

「し、します！ ぼ、僕、か、かか川澄さんとしちゃいます！」

緊張のために声が上擦り、するなと言われたエッチの確認を言葉でしてしまう。

樹里奈はそんな草太を指の間からチラッと見ると、顔を隠していたその両手を口の前あたりでギュッと握りしめる。

「あ、あの……高辻くん……」

「は、はい！」

「……………嬉しい。……初めてを……好きになった人とできて」

「ふえええ!!」

自分以上にいっぱいいいいに見える樹里奈が、そんなことを言ってくれて、心の底から嬉しかった。

小柄な体に充満している獣欲を、彼女に対する愛おしさが上回る。

「僕もです！ 大好きな人と両想いになれて！ こうして初めてをすることができて！」

万感の思いでそう叫ぶと、樹里奈は雷にでも打たれたようにその女体をビクンと震わせ
て「……も、もう本当に……幸せすぎだよぉ」と呟いている。

それは僕のセリフです、と心の内で叫びながら、少年は痛いほどバキバキに筋張つてい
る己の男根を掴み、彼女の入り口に押し当てた。

「ツツふあああ!!」

肉先で感じた蜜液の熱さとヌルみに、思わず鋭い声が漏れてしまう。

そのまま己を樹里奈の中に埋めていこうとするが、滑ってしまつて上手くない。

「あ、あれ？ えっと……こ、ここかな？ あ、あれ？」

彼女の牝華がびっちり閉じているために、入っていくべき蜜壺の位置がよくわからず、
初体験の少年は手間取ってしまう。

「あはあん！ そ、そんな觸るみたいなことしちゃ……んっ……だめええ」

大陰唇の膨らみに触れただけで全身を震わせた樹里奈は、縦割れの筋を何度も往復され
て、M字に開かれた両脚を淫らにビクつかせる。

草太の方も、蜜液に触れてヌルヌルと擦れるたびに、肉先から眉間にまでビリッと
流れるような鋭い肉悦が弾け続けた。興奮しきっている童貞少年では、これだけでイッて
しまいかねない快感だ。

（だからローションを使うと、あんなに気持ちよかつたんだ！）

ブルマ尻コキやパイズリなど、これまでの粘液まみれの交わりは、まさに疑似セックスだったのだと、遅ればせながら気付かされた——そんな時。

「つふああ!!」「はあああッ!!」

彷徨^{さまよ}わせていた肉先が唐突に華芯を捉え、二人の口から同時に鋭い声が漏れる。

亀頭が先ほどもでとは明らかに質の違う、牝肉の圧迫感に包まれていた。

草太はやる気持ちを必死に抑えて、暴発しないようにゆっくりと腰を沈めていく。

（こ、これが女の子の中ッッッ!）

入り口すぐは思ったよりもコリッとした感触なのに、たつぷりと満ちた愛液の効果で痛みは全くない。さらに奥へと進んでいくと、しなやかな牝褌たちに出迎えられて、まるで無数の舌にペニスを舐め回されているようだ。

背筋をゾクゾクゾクつと震わせるほどの愉悦が駆け巡り、強く奥歯を噛みしめる。

「ああ……た、高辻クンの熱いのが……わ、わたしの中に——くふあああッ!」

樹里奈が今までとは比較にならない甲高さで、悲鳴にしか聞こえない声をあげた。

「つくうううう!!」

直後、スムーズに自分を受け入れてくれていた膣壁が、もの凄い圧力で中の男根を締め付けてくる。

その尋常ではないキツさに驚いて、思わず股間を見下ろしたら——「ふええええ!!」

二人の結合部から、真っ赤な鮮血が流れ出していた。

「わわわわわ!! た、たたた大変だよ!」

びっくりして腰を引こうとしたら「だめ!」とその流血している本人に止められる。

「い、いやでも、血、血が出てて……あわわわわわっ」

情けないほど動揺する自分とは対照的に、樹里奈の方はジッとこちらを見上げていた。

「……………は、初めてなんだから……………当たり前だよ」

彼女に言われてハッとする。

そうだ。彼女は処女なのだ。

パージンブレイクした際に、出血するのは当たり前ではないか。

バカみたいに慌てた自分が恥ずかしい。

「……で、でも……本当に……僕が川澄さんの初めてを……」

片思いをしていた相手から処女を捧げられた喜びで、魂ごと全身がジンと震える。

「あ、あの……でも、本当にこのまま続けて大丈夫?」

理由は分かったが、出血していることに変わりはない。

パージンブレイクにどう対応していいかわからない少年は、素直にそう訊ねていた。

「……し、しばらくは……このままジッとして欲しい」

樹里奈が痛みに耐えているような震え声でそうお願いしてくる。

「う、うん！ もちろんそうする！」

草太はガクガクと頷いた。

今、自分を締め付けている膣壁の圧力がとにかく尋常ではない。まるで手で思いつき握りしめられているようで、たつぷりと分泌している愛液がなければ確実に痛みを感じているレベルだ。これでは、そもそも動こうにも動けない。

「……………」

二人はそのままジッと無言で見詰めあう。

（……で、でも……このまま何にもしないっていうのも……）

その思いは彼女も同じようで、泣いた直後のように潤んだ瞳でこちらをジッと見上げる表情が、何か物欲しそうな顔に見える。

草太はその美貌に吸い寄せられるように上半身を倒して——むちゅう。

自然と唇を重ねあわせていた。

「んん……た、高つじ……くうん……んんん」

そのまま互いの唇を甘く吸いあっていたら、樹里奈がさがるような手つきでこちらの背中に両手を回し——ヌルンと舌を入れてきた。

「ん——!？」

彼女の肉片がこちらの味覚器官に触れた瞬間、脳味噌の皺の奥まで痺れるような快感が

走り、草太は両目を大きく見開いていた。

（な、なに今の!? ベロチューすつごく気持ちいい!）

そう認識した直後には、こちらからも積極的に舌を絡めていた。

「んんん……んんん♡」「ッッんん……レロんちゅんん♡」

きつく重ねあわせた唇の内側で、二枚の舌が激しく絡まりあう。

全く想定外の肉悦だった。

唇だけのキスも充分に気持ちよかったが、それは『好きな女の子とキスしてる』という精神的な部分も大きかったと思う。

しかし舌まで絡めあうディープキスの場合は、快感の質がまるで違う。

しなやかな味覚器官同士を直に触れあわせることで、唇を重ねあわせるだけのキスとは一線を画す、もっと原始的で、強烈な肉悦が沸き起こる。

無論、キスと同様——否、ただのキス以上に深い一体感も味わえる。

——レロぐちゅん！ヌルクちゅッ！レロくちゅ、ぬるるん！

草太は樹里奈の中に自身を深く入れたまま、己の唾液を相手の舌に塗り込むような、執拗なキスを夢中で続けた。

「っぷふふぁ……」

初ディープキスの肉悦で舌先がジンジンと甘く痺れたすと、息継ぎもかねて草太はやっ

と顔を上げた。

熱烈すぎたキスに意識をポーンとさせたまま、自然と視線を下に向ける。

「っふああ……た、高辻くうん……」

金髪の恋人がキスの余韻でトロンとした顔をして、こちらを見上げている。

（ふわああ!! す、すっごく色っぽいよぉー!）

その濡れた唇も、桜色に染まった頬も、切なげに寄った眉間の皺すらも、全てが牡の欲情を猛烈に刺激してくる。

今の樹里奈は、これまで見たことがないレベルでセクシーだ。

（それにアソコの中も、今はこんなにトロットロになってるし!）

膣壁の締め付け具合も、破瓜^{はか}直後の握りしめるようなキツさから、程よいものへと変わっていた。

「こ、このままエッチ、続けますよ!」

「うん♡ 高辻クンの好きにして——っはああん!」

興奮の極致に達した少年は、相手の返事を最後まで聞く前に、牡の動きをスタートさせていた。

「っくううう!!」

一擦りだけでイッてしまいかねないほどの肉悦が、いきなりペニスで炸裂し、草太は反

射的に奥歯を再び強く噛みしめていた。

しかし、一度始めた腰の動きは止められない。

——グチュ、くちゅ、くちゅん。ぐちゅ、ずるるん。

ざっくりと割れた蜜華の中心に、深く己を打ち込んでいく。

しなやかな膣壁に竿肌全面を絞られながら交わるその快感は、全身の毛穴から官能の汗がブワツと一気に吹き出るほどの肉悦だった。

「はぁあん♡ き、気持ちいいよぉ♡」

そして自分に貫かれている恋人の反応が、少年の鼻息をますます荒くさせる。

（ちゃんと川澄さんが感じてくれてるううう！）

初体験で腰使いがぎこちない自覚もあったし、己のモノが決して大きくないこともわかっていた。樹里奈のようなセクシーボディの持ち主で、尚且つ処女を、自分なんかがちやんとセックスで感じさせられるのか、実は少し不安だった。

しかし今は彼女の方が、自分以上に性の悦楽を享受しているようにすら見える。

「そんな奥までズンズン突いちやらめえええ！ 高辻クンのが凄すぎるよぉおお！ はぁぁぁあん！ 熱くて、硬くて、大きすぎてええ、こんなの気持ちよすぎるよぉおお！」

こんな嬉しすぎることを叫びながら、激しくその身をビクつかせてくれている。

「ぁぁぁぁ！ ボクもだよぉおお！ ボクもめちゃくちゃ気持ちいいよぉおお！」

体中ケガをしているはずなのに、嘘偽りなくこれまで生きてきた中で、今が一番気持ちいい。

肉体的にも、精神的にも、こんなに満たされているのは初めてだ。

（こんなんじや、今すぐにでもイッちゃうよおおお！）

しかし暴発しないようにする理性よりも、セクシークイーンのバージンボディがもたらす肉悦の方が上回り、腰の動きを止められない。

大量の愛液でトロトロになった膣壁と、限界まで剛直した男根が、激しく擦れて混じりあう。一突きごとに、眉間の間まで突き抜けてくるような鮮烈な肉悦が迸る。

「一番奥まで届いてるうううう！ 高辻クンの逞しいのでええ、お腹の中までグチャグチャに掻き回されちゃってるうううう！」

特に強く腰を突くと、膣壁とは明らかに感触の違う弾力に肉先がコツンと当たる。

そこに触れるたびに、トロロンとしていた牝路がキュンと窄まり、竿肌を削り込まれるような壮絶な肉悦が脳天まで轟いてくる。

（うわあああああ!! それに今の川澄さんエロすぎだよおおお！）

肉体的な快感だけでなく、視覚からの刺激も凄まじい。

自分の動きに合わせて、学園一のセクシークイーンがセックスの愉悅に身悶えている。

「こんなの初めてええ！ あ、頭の中が気持ちよすぎて真っ白になっちゃうのおお！」

そんな嬉しすぎるセリフを叫びながら、女性器に負けないぐらい官能に潤んだ瞳で草太を見上げ、大きく開かれた長い両脚で淫らに宙を漕いでいる。

時折、靴下の中の指たちが、その身で受け止めきれなかった肉悦を逃がすように、ピクンピクンとバラバラの方向を向いて折れ曲がる姿がたまらない。

（あああ！ おっぱいがあああ！ 川澄さんのおつきなおっぱいがあああ！）
中でも目の前で揺れている彼女の胸が、少年の視線を特別引き付ける。

半脱ぎ状態の制服姿の中、剥き出しになっている特大バストが、バルンバルンと大きく揺れていた。そのサイズが細身の体に比べてあまりに豊かなため、彼女自身の体がベッドの上で揺れるタイミングと、乳房が上下するタイミングが半拍ほどズレている。

——グチュ、ヌチュ、ぐちゅん！ ズンズンずちゅずちゅん！

彼女をもっと感じさせるため、そしてその乳房をもっと淫らに揺するため、腰の動きがさらに加速。引き締まった無数の膣壁たちを、己の亀頭で磨り潰すように突き進む。

「た、たまないよおお！ こんな気持ちよすぎてスグにいつちゃうよおお！」

樹里奈ほどのセクシーボディを相手に、こんなに激しいセックスをして、初体験の草太がそんなに長く持つはずがない。

腰を一回突くごとに目の前が白く瞬くほどの快感が弾け、アッという間に限界まで追い詰められてしまう。

「イッチャうよ！ 本当にこのままイッチャうよおお！」

もう引き返せないところまで昂ってしまった少年は、最高のフィニッシュを迎えるために、痙攣にも似た激しい突入を開始していた。

「はあああん！ わ、私も凄いいい！ なんか来るよおお！ これがイクって感覚なのおお！ 初めてだよおお！ 腰の奥からなんかキチャううううう！」

その遮二無二すぎる突入に、樹里奈のグラマーな女体も激しくビクつく。

（ええええええ!! セクシークイーンって言われてたのに、まさかオナニーすらしたことなかったのおお!!）

処女だったことにも驚いたが、この告白も驚きだ。

樹里奈に初めて性の絶頂感を与えられる喜びで、草太の全身に、男としての凄まじい満悦感が駆け抜けた——まさにその瞬間。

「はあああああああん！ イクうううううううううう！」

ベッドの上で樹里奈が大きく仰け反って——ぶしゃああああああああああ！

盛大に潮を吹き出した。

「うわああああああ!!」

深く交わっている蜜壺が激しい痙攣をはじめ、それまで淫らに宙を漕いでいた両足も、指先まで反り返ったままビクつきはじめる。



「……………あ、あとその……………今日は絶対に大丈夫な日だから、その……………な、中で出して」
「ふええっ!? い、いや、でもさすがにそれはマズいよ!」

まだ学生の身分では、文字通り腰が引けてしまう。

「……………だって……………一度でいいから……………草太と最後までしたいんだもん」

しかし、彼女が前を向いたまま口にする強い思いに、少年の躊躇も吹き飛んだ。

「わ、わかった!」

興奮の極致に達した草太は、膝で歩いて四つん這いになった彼女の下半身へと突き進んでいく。

（樹里奈のお尻!）

かつてブルマに包まれたこの双丘に、どれほど誘惑されたことだろうか。

無論この体勢でも、男の劣情を刺激してやまない極上の丸みは健在だ。

鋭くくびれたウエストから、その艶やかな盛り上がりへと至る急カーブが、本来は小振りなヒップをたまらなく肉感的に見せている。

「しますよ! このまま後ろからしちゃいますからね!」

背筋から続く深い窪みの延長線に尻の谷間が走り、その中心では皺の少ない小穴がひっそりと息づいていた。

草太はそのさらに下にある彼女の入り口に、猛る男根を差し向ける。

経験の浅い自分では、一発で結合を決めることはできない。それでも興奮の極致にある少年は、鼻息荒くガムシヤラに肉先を上下させて——っぷん。

「ッくっふう♡ 草太の熱いのが……当たってるう♡」

手当たり次第なやり方で、彼女の入り口を探り当てた。直後にビクンと震えた牝尻を掴み、獣欲に任せて腰を一気に深く突き入れていく。みっちり詰まった蜜肉に龟头が埋まり、中を掻き分けていく快感で、牝尻を掴む指にもさらに力が籠もる。

「あっ……は、入ってきた——はあああああッ！」

ぬずるるるん、つと剛直が中に埋まっていくのとリンクして、四つん這いの牝猫が首輪の嵌まった細い首を大きく反らし、甲高い声を絞り出す。

「っあ……っくああ……こ、今度も……奥までヌルンヌルンだあ……」

その後ろで草太も、トロトロに蕩けている蜜襖たちとの一体感に、愉悅で頬を震わせていた。

溝の深い膣壁と、締め付けの強い膣壁の感触はまさに絶品。獰猛な獣欲に突き動かされていた腰が、気持ちよすぎて思わず止まってしまうほど、彼女の蜜壺は名器だった。

「草太のガチガチになったおちんちんがあ……お腹の奥まで入ってきてるよお♡」

尻をこちらに捧げる格好をした牝猫も、はつきりと愉悅の滲んだ声で、しみじみそう呟いてくる。

「このまま後ろから続けるよ！」

草太はまず、彼女の腰を両手で掴んだ。

（うわっ!? やっぱりすっごく細ッッ!?）

樹里奈のウエストのくびれは充分に見て知っていたが、こうして実際に両手で掴むと、その脅威的な細さに改めて驚かされる。

胸の横がえぐれたように締まっているのは分かっていたが、腹の厚みも薄いのだ。あのボリウム感たっぷりの乳房を実らせている体とは、とても思えない肉付きである。

（お尻も、こんなにプリンプリンしてるのに!）

それでいて、決してギスギスと筋張った体はしていない。己の下腹が密着している双丘には、しっかりと牝脂がのっけていて、綺麗な丸みを帯びている。

ボン、キュッ、プリンな極上のセクシースタイルは、後背位でも健在だった。

「っふあああああゝ♡」

草太がじつくりと腰を引きはじめると、樹里奈が糸を引くような甘い官能の声を漏らす。己の肉傘が、密着した膣壁たちを内側から搔きだすような感覚に、少年も「っくうゝ」と奥歯を噛みしめる。

そして肉カリが露出してしまいうギリギリまで男根を引いてから、再び腰を突いていく。

「んッ……くうんはあおおおゝ♡」

直後、樹里奈の奏でる艶声が、子宮の奥底から絞り出すような、ビブラートの少しかかったものへと切り替わった。

そんな喘ぎ声の変化も耳で味わいながら、むっちりと言った牝褸たちを、己の剛直で思いのまま掻き分けていく快感に酔いしれる。

——ぐちゅん、ぬちゅ、ぐちゅッ。くちゅ、ずちゅ、ぬるるん。

結果、腰の動きが結合時の猥染みた突入ではなく、牝牝の性器をじつくりと馴染ませあうような、ねちっこいものへと落ち着いていく。

(アソコだけじゃなくって、お尻の感触も気持ちいいし！)

腰を突くたびに、下腹に当たるまるやかな弾力もたまらない。ローションまみれのブルマ尻コキを経験しているだけに、その気持ちよさをすでに十分に知っている。が、こうして後背位で交わると、違う角度からその素晴らしい感触を堪能できる。

「はああああん♡　そ、そんな風に、アソコの中を掻き回すみたいに、じつくりされたら、き、気持ちよすぎてえ——くふあああああん♡」

尻を抱かれている恋人が、辛抱たまらないという感じで大きな喘ぎ声をあげて、少年は恍惚とした顔のまま視線を彼女に向けた。

(こ、これはッッ!?)

樹里奈はまだ猫耳カチューシャに首輪付きで、ビキニの上すらも着けたままだ。

この光景を見ると、本当に、自分のペットと交尾をしているようなアブない気分になってくる。先ほどのフェラ奉仕とは、比較にならないアヤしさだ。

胸の奥から、今までとは違う種類のドキドキが溢れだす。

草太は体を前に倒して、彼女の背中に覆いかぶさる姿勢になると、首輪から伸びているリードを自ら再び握りしめていた。

「……ね、ねえ。樹里奈にお願いがあるんだけど……」

「ん？ なあに♡ こんな時に改まって——っはああん♡ な、なんでも言つてえ♡」

「……あ、あのね……それじゃあ、さっきまでみたいに、その……『ニャン』って言ってもらえないかな？」

「!？」

草太がそうお願いした直後、自分を受け入れている蜜壺がキュンと鋭く締めまり、下腹に密着している牝尻がブルルツと震えた。

「は、はにゃん♡ ジュリナのご主人さまはスケベだにゃん♡」

彼女は恥ずかしそうに俯きながらも、リクエスト通り『ご主人さまとそのペット』を演じはじめてくれる。

「し、しようがないだろ。ペットのジュリナが、こんなにエッチなんだから」

対して草太もすぐにそれに調子を合わせる。今よりもさらに大きな興奮を得るために、

自ら積極的に『ご主人さま』になりきっていく。

普段の自分からは考えられないことだ。が心の底から樹里奈に惚れられているという実感と、樹里奈の初めてを捧げられたんだという自信が、気弱な少年を大胆にさせていた。

「ほ、ほら。こ、こっち向いて」

上半身を彼女の背中に被せたまま、左手に巻きつけたリードを引く。

「あん♡」

四つん這いの牝猫はそれに合わせて、こちらにそのセクシーな美貌を向けてくる。

官能にうっとり潤んだ瞳と視線が合ったその直後、二人は深く唇を重ねていた。

二枚の舌はその境界線でぶつかりあい、すぐに激しく絡まりはじめる。

「んちゅん、樹里奈あ、じゅりなああ——レロんちゅん♡」

「ごしゅりんさま♡ ごしゅりんしゃまああ——ンチュれろんッれろろん♡」

ディープキスの快感に『ペットとご主人さま』のアブノーマルな興奮まで上乘せされて、彼女を感じることに以外に、何も考えられなくなる。

草太はねちっこい腰の動きを続けながら、右手でビキニに包まれた豊かな乳房を驚掴みにしていた。

バストが下を向いているために、いったいに開いた掌に柔肉の全重量がずしりとのしかかってくる。乳肉自体がもたらすその柔らかな気持ちよさだけでなく、先ほどまで同じ手

で掴んでいた細いウエストとのギャップを強烈に実感し、ますます鼻息が荒くなる。

「もつとご主人さまの好きにしてえ♡ ご主人さま専用に品種改良された、おっぱいニャンニャンのこと、もつともつと可愛がつてえええ♡」

濃い恥じらいをその声に滲ませつつも、自分をさらに喜ばせるために、より過激な言葉を重ねる彼女が愛おしくてたまらない。

「ご主人さまのこの遅いオチンチンでえ、ペットのジュリナにたっぷり種付けして欲しいにやああん♡」

アブノーマルな興奮で熱く茹で上がった少年の脳味噌に、牝猫の淫らな囁ささりが熱湯を撒くように染み込んでいく。

もともとが男の欲情をそのまま具現化したようなルックスなのに、今の彼女は男の劣情を誘ってやまない格好までしている。猫耳を頭にのせたまま、にやんにやんと甘く鳴き、こんなことまで言ってくる。

本当にそのために開発されたペットだと錯覚するのに、充分すぎる状況だった。

「あああああ！ 樹里奈ッ！ ジュリナアアアア！」

気付いた時には、凄まじい勢いで彼女を真後ろから突いていた。

「ご主人さま凄すぎだにゃん！ ジュリナの一番深いところまで、ズンズン届いちゃってるにやああああん！」

彼女のアブない喘ぎ声を聞きながら、少年の妄想もさらに加速する。

——今、自分はジュリナという名の牝猫とセックスしているのだ。

——自分好みに品種改良された肉ペット相手に、種付け行為をしているのだ。

現実ではありえない妄想が、彼女のセリフによって鮮明にイメージされ、腰の動きがさらに激しさを増す。結果、猛スピードでトロトロに蕩けた牝猫の名器と交わることになり、ペニスから迸る快感量も増大。精神面だけでなく、肉体的にも彼女を責めることに歯止めが利かなくなる。

「ふにあああああん！」

そのあまりに苛烈な突入に、交尾中の牝猫が体の内側から弾かれたように前を向く。

長い金髪を波立たせるように、大きく顎を仰げ反らす。

「ら、らめっ！ こんならめ！ ま、またイッチャうにゃん！ ご主人さまのおちんちんでええ、ジュリナは何度もイッチャうにやああああん！」

四つん這いの姿勢を維持している太腿が強張って、くびれたウエストからヒップにかけてがビクビクと小刻みに痙攣を始めた。

このままでは初体験の時と同じように、相手が先に果ててしまう。

しかし草太の一番の望みは、二人同時に登りつめること。

そうでなければ今この全身に満ちている官能を、樹里奈と共に味わい尽くせない。

直感でそう悟った時には、反射的に口を開いていた。

「ま、まだダメ！ 僕よりも——ご主人さまよりも先にイッたらお仕置きだぞ！ 中に出てやらないぞ！ 種付けしてやんないからなあああ！」

「ふにゃん!!」

まさか草太の口から、そんな命令が飛び出てくるとは思っていなかったのだろう。

彼女は驚きでビクンと体を震わせて、すぐに今まで以上に甲高い声で喘ぎだす。

「も、もうらめえええええ！ そんな命令されたら余計に早くイッちやいますうう！ ご主人さまより先に、ペットのニャンニャンがイッちやうにやああああん！」

「ボクももうイクから！ あああああ！ 一緒にツツツ！ あああああ！ あともうちよつとだけえええええ！」

草太は右手で強くバストを握りしめたまま、左手はがっちり彼女の肩を掴み、がむしやうに腰を突き入れた。

——パンパンパンパンパパパパン！

部屋に響き渡る、己の腰と彼女の尻がぶつかりあう音の間隔が、どんどんと狭くなっていく。

極限の獣欲で金属の塊のようになっていた男根と、愛液滴るトロトロの牝褸が猛烈な勢いで混じりあい、視界が白く瞬くほどの肉悦が弾ける。そして——。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!